

# 主体の遠近法・序

—— 20世紀精神医学・経験世界・権力構造 ——

周 藤 真 也

1

大澤真幸は、19世紀末期から20世紀の初頭にかけてを「知の大きな変革期」であったと捉えている（大澤, 1997）。大澤によれば、ジークムント・フロイトによる精神分析（学）の誕生は、19世紀末から20世紀初頭にかけて起こった言説システムのカタストロフィックな変化を集約して代表し、20世紀の知への大きな変革を象徴するというのだ。ここで象徴的に取り上げられるのは、精神分析が完成した年として認定される、フロイトが『夢判断』（Freud, 1900=1968）を発表した1900年である<sup>(1)</sup>。大澤は、この書物を次のように位置づける。「〔『夢判断』という）タイトルが暗示するように、フロイトはこの著作を一種の解釈学として提示しようとしている。……だが、実際には、この著作は、〔『解釈学』という語が指し示すような）19世紀からの連続というよりも、そこからの断絶の方をより強く印象づける。……19世紀からの連続こそが、同時にまた、そこからの断絶でもありうる、ということはこの著作は暗示しているのである」（大澤, 1997: 83, 括弧内は筆者による補足）、と。

しかしながら、そうであるとしても、「精神分析」という語によって表象される20世紀の知や権力のあり方は、一度20世紀中葉までに大きな変容を受けているように思われる。これは、第一に精神分析の誕生から精神分析が20世紀の知として浸透し、受け入れられるまでのタイム・ラグである。精神分析の知が20世紀の知を象徴するものであるとしても、それが西洋世界の知の体系の中に浸透し、当然のごとく受け入れられるようになるまでの、ある程度の時間が必要であったと考えられるのである。だから、私が提起しておきたいのは、1900年の精神分析の成立に対して、精神分析世界の完成を1960年に置いておくということである。この60年の間には、いくつもの出来事が位置している。精神医学が、ある意味で人間学的な転回を遂げ、人間学的に発達したこと。それにともない、精神医学の臨床実践において、心理学と協業しながら、精神療法（心理療法）が一般化していったこと……<sup>(2)</sup>。

だが、私が主張するのは、このようなことは、一方では基本的にあの精神分析

とは一切関係がないことであり、他方ではそれでありながらもある仕方で精神分析と交錯してくることである。しかし、後者の側面は存在しない。なぜなら、後者の側面は重なり合うように見せかけて完全にすれ違っているからであり、そのことにおいて精神分析とは一切関係がなくなってしまう。そのとき、それは前者の側面へと吸収されているのである。

## 2

われわれはこのことを考えるとき、ひとつの作品 work にたどりつく。哲学者ジル・ドゥルーズと精神科医でもあるフェリックス・ガタリによる共著『アンチ・オイディプス』(Deleuze & Guattari, 1972=1986)において、かれらは精神分析を「資本主義」の生産の秩序に結びつけた。しかしながら、かれらのいう「資本主義」は、原初的な水準において、あの資本主義のことではない。それは確然として資本主義であるけれども、意味という貨幣の資本主義であるのだ<sup>(3)</sup>。だから、厳密な意味でそうした「資本主義」と直接に結びつくのは、精神分析ではなくオイディプスのほうである。なぜなら、オイディプスは意味の世界において、無際限に、そして反復して欲望を作り出す表象のことであるからだ<sup>(4)</sup>。

このことは、精神分析と照らし合わせて言うなれば、次のようなことである。精神分析の「解釈学」は、われわれの「主体」の原型と呼ぶべきものを作り出す。しかしながら、それが実効するのは、精神分析(の「解釈学」)の作り出す世界がわれわれの経験世界と折り重なり、われわれの経験世界を表現していくことになることにおいてである。そのとき、精神分析的なものが精神分析の世界を越えて成立し、それを精神分析の世界へと置き換えていく。そのもっともわかりやすい例をあげるならば、純粹に精神医学上の精神分析に対する、精神分析的言説の世界を置いてみるのがよい。この物語世界(いうまでもなく、その象徴があのおイディプスの物語である)は、もうひとつの精神分析の世界を形づくり、それをわれわれの「経験世界」とするようになる。「神経症」はわれわれの経験世界の近傍に置かれた形象となる。あのもうひとつの精神分析の世界こそがわれわれの経験世界であり、それは神経症的な世界であると云われるようになるのだ<sup>(5)</sup>。

だが、そうして捉えられる神経症的な世界とは、当の神経症を抜け落とすものであるばかりでなく、しばしば当の神経症を覆いかぶし、当の神経症がなかったかのようにふるまう。すなわち、神経症の世界は、われわれの経験世界である。と。この命題が真なるものとして成立する世界こそが、われわれのいうあのもうひとつの精神分析の世界にはほかならない。このことは、当の精神医学においても例外とはならない。むしろ精神医学こそがわれわれの経験世界の方へと引き寄せられてしまったというべきかもしれない。精神医学における精神分析的系譜は、

しばしばこうした解釈へと引き寄せられ、あのもうひとつの精神分析の世界と重なり合おうとする。

ともあれ、精神分析の成立によって、果たして精神病患者（／神経症者）は確実に捉えられるようになったのか。ここで明らかになる問題系は次のようなものである。精神病がわれわれの経験世界に属するものとして捉えられるとき、もはやそれは異常－狂気としては捉えられない。だが、それは精神医学のある部分において、より徹底して「精神病患者」を排除し、差別することを可能にしているのではないのか（神経症／精神病の世界がわれわれの経験世界を表すことにおいて、精神病患者とはわれわれ自身のことでもある！）<sup>(6)</sup>。これは異常－狂気をめぐる解釈学的作用であり、精神医学が人間学的に徹底したことの効果である。人間学的な精神医学が用いる患者の了解それ自体は、その現象が正常なものとしての値をとる。つまり、了解－説明するという科学的な探求において、異常なものは存在してはならない。それははじめから正常なものであり、異常－狂気はどこまでも対象からすり抜けてしまわなければならないからだ<sup>(7)</sup>。

問題なのは、精神医学がかれらが異常であるということを完全には捨て去らないまま、解釈することとともに正常なわれわれの経験世界へと組み入れることである。そして、もし精神分析の知が20世紀の知や権力を象徴するならば、この現象が精神医学にとどまらない、われわれの経験世界全体を表象しているはずであるということである。しかし、われわれはこれをまたひとつの沈黙とともに語らなければならない。精神分析がわれわれの経験世界を超え出て、もうひとつの精神分析の世界を作り出すように、そうしたわれわれの経験世界の全体像は、精神医学の世界を超え出したもうひとつの世界であるからだ。それは、そこに映し出された像であって、その像そのものはあくまでも虚なるものとしてある。ここにおいて、精神分析と経験世界とは、条件を異にしてくる。なぜなら、精神分析は虚なるものを対象として成立していくのに対して、経験世界はどこまでも虚なるものであるからだ。だから、精神分析と経験世界とは、融合するようにみせかけて次第に分離していく。しかし、このことそれ自体は、精神分析と経験世界に対して、均等には配分されていない。精神分析にとって経験世界は、対象となりうるのに対して、経験世界にとって精神分析ははじめから何の関係もないのだ。だから、精神分析は一方的に経験世界に進出し、経験世界を植民地化していく<sup>(8)</sup>。

### 3

われわれの主張は、精神分析に象徴される20世紀の知の様態が、ひとつの権力構造を表象していることである<sup>(9)</sup>。それは、精神分析に差し戻して捉えるならば、精神分析理論が、精神医学の世界の内部のことながらにとどまらず、一般に受容さ

れるにしたがって精神医学の世界を超えてわれわれの経験世界を捉えるまなざしのあり方として定着していくことにつれて成立していく。われわれはこの権力様態を、われわれの経験世界と精神医学における事象との対照性のもとに記述していくことにしたい。

私は（これから展開されるであろう）この論考に対して主体の遠近法 *perspective of the subject* という名を与える。それは、20世紀の知が主体なるものを捉えるために試行錯誤を繰り返してきた過程であったことを表象するためであり、また人間学的な精神医学そのものがそうしたパースペクティブを繰り返す場であるからだ。だが、ここでひとつ付け加えておかなければならないのは、われわれはこうした遠近法を「近代」とともに考えないということである。なぜなら、近代という物語の崩壊したポストモダン以後のこんにちにおいて、もはや遠近法をあの近代との直接的な関係において捉えることは不可能であるからだ<sup>(10)</sup>。

主体 *the subject* は、あくまでも虚像として存在する。主体の遠近法とは、その捉えられないものを捉えるという試みそのものの視覚化のことにほかならない。

#### <注>

- (1) フロイトを源流とする精神分析が、20世紀の哲学・思想に多大な影響をあたえたとしても、20世紀の知への変革において精神分析のみを取り上げるとすれば不十分であるだろう。現象学もまたこの時期に成立してきていることを見逃してはならない。そうした意味において、エドムント・フッサールの『論理学研究』（Husserl, 1900/01=1968-76）の刊行が1900年にはじまっていることは、フロイトの『夢判断』と同様に象徴的に取り上げることが可能である。
- (2) こうした観点から20世紀の精神医学史を追う試みとして周藤（1997）。たとえば1960年代に勃興してくる反精神医学 *anti-psychiatry* は、20世紀前半の知の様態の変移の精神医学上におけるひとつの結果として出てきたものと考えられる（周藤, 1997, 1998 参照）。しかし、こうした知の様態の変移は、精神医学という閉じられた領域においてのことだけでなく、20世紀の知の全域を包み込んだものであるように思われるのだ。だから、精神分析が20世紀を象徴する知の様態であるならば、それは精神医学においてということとは別個に考えなければならない。さらに、精神分析が20世紀の思想に何らかの影響を与えたとするならば、そこにみられる精神分析とは、精神分析が照射する経験世界とは区別しなければならないだろう。これらのことがらをここで詳述することはできないが、少なくとも1960年が構造主義やポスト構造主義の成立、そして「ポストモダニズム」の展開に向けて重要な年であることを指摘しておくことにしたい。
- (3) これは資本主義という思考についての転換であった。それは、資本主義を特殊から普遍へ、社会から〈私〉へと引きつける転換であった。もし、このことを前提として、経済学を構成するとすれば、経済学はどのように置き換えられるのか。
- (4) 重要なことはこの欲望が単なる欲望などではなく、闘争の欲望であったり、破壊の欲

望であったりすることである。これは、オイディプスの語源たる例の物語と照らし合わせてみると奇妙な対照となって立ち現れるであろう。そこでは決して欲望されているのではなく、われわれがオイディプスの物語の外部に構成する物語世界においてそうであるのだ。だから、「欲望すること」が配分されているのは、かれらのほうではなく、われわれのほうである。

- (5) たとえば、こうした観点から近代社会を捉えたものとして長谷（1991）。
- (6) こうしたことがらを考えるとき、反精神医学的知見は改めて置き直されるであろう。1960～70年代に盛んであった反精神医学的言説の問題性は、周藤（1998）でも一部取り上げたように、反精神医学の営為自体が闘争の欲望による「経験の政治学」から自由ではないこと、精神病者を排除・差別ことに対抗するように狂気あるいは精神病を賛美する傾向にあることである。
- (7) 筆者は、こうした精神医学の抱える認識論的問題系をいくつかのところで言及している（周藤、1998、2000）。
- (8) いうまでもなく筆者のいう経験世界とは、現象学でいう生活世界 *Lebenswelt* の概念に相当している。「生活世界」概念の哲学から社会科学にいたる微妙な意味合いの差違に留意しなければならないが、ハバースが生活世界の植民地化として取り出したのはこのことであったと考えられる（Habermas, 1981=1985/87/87）。
- (9) 筆者はこの権力様態に対して、「他者の権力」という名前を与えておいた（周藤、1999）。
- (10) 筆者の立場を明らかにするならば、次のような単純な事実から出発することになるだろう。現在は近代ではないし、現在は現代ですらあり得ない。もちろんこのことはいわゆる「ポストモダン」とは直接は関係ない。

## 文献

- Deleuze, Gilles & Félix Guattari, 1972, *L'Anti-Œdipe: Capitalisme et schizophrénie*, Minuit. (=1986, 市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂病』河出書房新社.)
- Freud, Sigmund, 1900, *Die Traumdeutung*. (=1968, 高橋義孝訳『夢判断』（フロイト著作集2）, 人文書院.)
- Habermas, Jürgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Bde.1-2, Suhrkamp. (=1985/87/87, 河上倫逸・M. フーブリヒト・平井俊彦／藤沢賢一郎・岩倉正博・徳永尙・平野嘉彦・山口節郎／丸山高司・丸山徳次・厚東洋輔・森田数実・馬場宇瑛江・脇圭平訳『コミュニケーション的行為の理論』（上・中・下）未来社.)
- 長谷正人, 1991, 『悪循環の現象学——「行為の意図せざる結果」をめぐる』ハーベスト社.
- Husserl, Edmund, 1900/01, *Logische Untersuchungen*. (=1968-76, 立松弘孝訳『論理学研究』1-4, みすず書房.)
- 大澤真幸, 1997, 「(資本)の想像力——精神分析の誕生」『現代社会の社会学』（岩波講座現代社会学1）: 83-156, 岩波書店.
- 周藤真也, 1997, 「20世紀精神医学の経験——分裂病と精神療法をめぐる——」『現代社会理論研究』7: 187-202.
- , 1998, 「反精神医学と家族, あるいは人間へのまなざし」『現代社会理論研究』8: 65-80.

———, 1999, 「『権力の死』の後に」『情況』Ⅱ-10-6 : 102-113.

———, 2000, 「日常生活の世界と自然的態度の記述 —— A・シュッツとW・ブランケンブルク」『社会学ジャーナル』25 : 71-82.

※本稿は、平成12年度筑波大学学内プロジェクト研究（奨励研究）の研究助成によるものである。